

ドイツの風に誘われて



中山万里子

## 序 文

中 嶋 嶺 雄

(東京外国語大学教授)

最近は外国体験や留学経験を綴った書物が数多く刊行されている。それらの中には、私たちの外国認識や世界像を補強してくれるものもあるけれど、たんに絵はがきの羅列のような印象しか与えないものも多い。

中山万里子さんがドイツでの生活体験を本にされると聞いて、私自身まさに「ドイツの風に誘われて」原稿を読ませていただいたのだが、一読して、中山さんにこんな素晴らしい文才と確かな眼が秘められていたことを発見し、本当に嬉しく思った。

序 文

中山万里子さんは、私の中学校、高等学校を通じての同窓生なのだが、印象は強烈で、それは、ピアノが飛び抜けて上手だったからである。たしか中山さ

んは、私たちの母校、松本市立清水中学校へ三年生のときに仙台から転校されてきたのだが、彼女のピアノは、そのテクニクといい、情熱的な演奏ぶりといい、当時からアマチュアの域を脱していた。松本深志高校時代の三年間も、彼女のピアノが多くの学友を魅了したものである。私もヴァイオリンを弾いたので、時には伴奏していたこともあったが、彼女こそはきっと演奏家の道を歩むのではないか、いずれにせよ、ピアノで生計を立てられているに違いないと固く信じていた。

以来、三十年余の歳月の間、お互いに離ればなれであったけれど、いまここに中山万里子というエッセイストが見事に登場したことを心から祝福したいと思う。

本書は、中山さんが言語学者の御主人(中山恒夫・大阪大学教授)とともに一九六八年から三年間、最初にドイツで留学生生活を送って以来、一九八〇年、八四年としばしばドイツを長期に訪問した体験を綴ったものであるが、それは、昨今のように国際交流が一般化する以前の早い時期における日本人とドイツ人、そ

して数多くの国からドイツにきた外国人との国際交流の心暖まる原点とも言える人の輪の拡がりを描いたものである。ビュヒナー先生をはじめとする恩師や大学教授の豊かな人間像、お得意のピアノが役立ってあちこちで音楽を通ずる出会いがあったことなども興味深い。一九六八年の「プラハの春」で抑圧されたチェコの友人の運命を気づかったり、アフガニスタンからの留学生のその後の消息を想ったり、今日の国際社会の大きなうねりをさりげなく感じさせるところがいかにも中山さんらしい。

本書のもう一つの特色は、美しいドイツの田舎町や古城がふんだんに紹介されていることであるが、それを中山さんは、「頑固なまでに自然と町を守り、行きずりの外国人にも親切を借しまないドイツ人気質」(一四二ページ)として、実にみずみずしい感性の中で描いている。

私は、中国やアジアのことを専門にするようになったけれど、実はドイツが大好きで、日本人にもっとも at home な外国は断然ドイツだと思っている。だから、私のゼミナールの研修旅行ではハイデルベルクやローテンブルクが欠

かせない場所になっており、前回は『若きウエルテルの悩み』の舞台でもあったヴェツラーを訪れてゲーテを偲んだりもした。数年前、次男がヘルマン・ヘッセの『車輪の下』を読んで是非この小説の舞台になったカルフへ行きたいと言うので、子供たちを連れてそこへドライブしたこともある。これらのドイツの町々が本書に点在してあの美しいドイツの田園風景のようなハーモニーとなっており、私もお蔭で久々に「ドイツの風に誘われて」読書を満喫した。多くの読者も、きっと本書に魅せられるに違いない。

## 目次

### 序文 中嶋嶺雄

### 第一章 フライブルクにて

ビュヒナー先生 3

ドナウの泉 10

ボーデン湖のほとり 15

### 第二章 想い出のボーfum

ボーfumの学生寮 23

ソラ豆のスープ 40

アウトバーンは閉鎖された 44

ニュルンベルクのマイスタージンガー 51

序文をお書き頂いた東京外国語大学教授・中嶋徹雄氏に心から感謝致します。

また、つたない原稿に御親切な助言を賜わった岩波書店編集部の田中博明氏と岩波ブックサービスセンターの寺島三夫氏に厚く御礼申上げたい。お二人の適切なアドバイスがなかったら、素人の私には、出版などとうてい不可能なことであった。

一九八八年十月二十三日

中山万里子

ドイツの風に誘われて

一九八九年三月二〇日 発行

頒価 九八〇円

著者 中山万里子

〒564 大阪府吹田市江坂町四-二-三三-二-三二六

製作

岩波ブックサービスセンター

〒101 東京都千代田区神田神保町二-三

岩波書店アネックス内

電話〇三-二六三-六六〇一

印刷三陽社 製本三水舎